

カンボジア国の特別支援教育報告③

－地域支援と公立小学校に併設された特別学級－

間々田和彦* VAN Vy**

間々田(2012,2013A,B), 間々田・VAN(2013)では、カンボジア国の特別支援教育のなかで、視覚障害児、聴覚障害児、肢体不自由児、自閉症児へのインクルーシブ教育、並びに Kampot 市の統合教育プロジェクトパイロット校について報告した。本稿では、障害児への地域支援の実態を調査するためにプノンペンから5時間あまり離れた Pursat 県 Pursat 市(以下、プルサット市)にある DDSP(Disability Development Services Program)の活動に注目し、カンボジア国での障害児への地域支援の一例を報告するとともに、支援する特別支援学級(特別学級)について報告する。この学級は、プルサット市の普通小学校に併設されている。

当初、教育省(Ministry of Education Youth and Sports 以下、教育省)のインクルーシブ教育担当者から、「発達障害」児者支援施設として DDSP の紹介があった。しかしながら、現地における面接調査の中で DDSP が、いわゆる「発達障害(Developmental Disability)」を対象とした施設ではなく、長年にわたり障害児者全般を対象とした地域支援施設であることが明確になったため、その報告とする。

1 DDSP の活動

1. DDSP の概要

DDSPはHandicap International of Belgium in Pursatによって創設された。創設団体が撤退した2003年以降、カンボジア国のNPOとなった。その際、同じ略称であるDDSP(Disability Development Services in Pursat)から、DDSP(Disability Development Services Program)へと名称を変更した。

この地にDDSPが創設されたのは、カンボジア国の中でも貧しい県であること、地雷被害者が多いことがその理由である。現在のところ、他の県にはDDSPはない。他の地域へもDDSPの活動を広げる希望があるが、予算が限られており、これまで以上にその活動を広げられていない。そういった状況ではあるが、タイ国境の近くの

Banteay-Meanchey県、Pailin県には創設を予定している。現在DDSPは、Ministry of Social Affairs, Veterans and Youth Rehabilitationが各県などに組織している Department of Social Affairs Veterans and Youth Rehabilitation(以下、DSAVYR)の中の組織として位置づけられている。



Fig.1 DDSP

2. 調査場所、調査年月日

調査場所：カンボジア国プルサット市 DDSP、およびプルサット市 Prey Nhy 小学校特別学級

調査年月日：2013年2月6日(追加調査2013年10月31日)

3. 調査方法

事前に設定した質問項目に従った、DDSPのディレクター PHENG Samnang氏および、スタッフへの面接調査、施設見学、特別学級授業参観。

2 結果1 (DDSP の活動)

面接項目は、支援対象、スタッフの概要、支援対象者数、利用者がDDSPを知るきっかけ、就労支援、DDSPへの支援である。

1. 支援対象

DDSPは、地雷被害者、脳性マヒ、肢体不自由、視

*筑波大学附属視覚特別支援学校 **Linguistic Department of Royal University of Phnom Penh

覚障害者、聴覚障害者、知的障害者等すべての障害者をその支援対象としている。具体的には次の4つのプロジェクトに従って活動している。

① Community Based-Rehabilitation (CBR): 地雷による下肢障害者を中心にすべての障害種を対象としているリハビリテーション。

② Mith Komar Pikar Project/Children with disabilities project: 障害児者への理学療法や、公立小学校に併設された特別学級への支援。

③ Paraplegic and quadriplegic Rehabilitation (QPR): 対マヒと四肢マヒを持つ大人のためのリハビリテーション。

④ Water and Sanitation Project: 障害者への水の供給と公衆衛生。

2. 支援対象者数

①支援児者数：現在、1,447名を支援の対象としている。支援対象者は主にプロジェクト①のCBRの対象者で、視覚障害、聴覚障害、知的障害、自閉症、下肢障害など全ての障害児者を対象としている。ただし、知的障害を伴わない単一障害の子どもたちがどのくらいの割合なのかは不明であった。



Fig.2 スタッフへの面接調査

②発達障害児：発達障害児については、「われわれには発達障害についての知識は無いが、われわれが支援している対象者の中の精神障害児に、それに相当するものがあるかもしれない」との回答があった。

3. 支援対象児者がDDSPを知るきっかけ

ラジオ、ワークショップ、DDSPのサービスを受けたことのある人からの口コミが中心である。そうした働きかけとともに、スタッフが支援対象児を見つけるため、直接地域へ出かけて、DDSPの活動について広報している。

4. 就労

①就労状況：全体的には脳性マヒではない肢体不自由者を除き、十分ではない。脳性マヒのような重度の障害のある子どもたちへは教育することはできるものの、仕事を見つけることは困難であると回答している。他の障害についても、単一の身体障害児者の中には、健常児者と同様に就労する者も若干名いるようだが、詳細は不明である。しかしながら、就労支援をおこなっている中で、就労できずに金銭的な支援を継続している対象者も数多くいるとの回答があった。就労支援は次の就労先の例に示すように、その実態把握は不十分であり、DDSPにとって大きな課題であるようだ。

②就労先(具体的職種)：モーターの修理、仕立屋、美容師、および、DDSPが支援しているボランティア活動。

5. スタッフ

①スタッフの構成：正規のスタッフは12名(男女は同数)で、他に30名のパートナースタッフがいる。パートナースタッフは、病院、DSAVYR、教育省等、県(国)機関からの派遣である。正規スタッフの中で10名が大学卒業、2名が高校卒業である。彼らはDDSPのプロジェクトのコーディネイター、DDSPの運営、教育、ソーシャルワーカー(カウンセリング)、理学療法の業務に関わっている。筆者がこれまで見学したカンボジア国内の施設・学校の中で、DDSPは最も大学卒業者のスタッフの割合が多い。

②スタッフの募集

DDSPのスタッフの募集は、インターネット、学校、政府機関、公共の場所での広報、NGOを介しておこなっている。スタッフの選抜は、提出された履歴書をもとに、面接調査をおこない決定している。スタッフの増員は、DDSPからNPOのドナーへその旨を申請し、承諾をうることが必要である。なお、ここでのドナーはNPOへの基金提供者の意味である。DDSPに限らず、多くのNPOが複数のドナーからNPOへ資金の提供を受けている。

6. DDSPへの運営支援

①DDSPのカンボジア国内での位置づけ:DDSPは、現在、DSAVYR内の一組織として位置づけられている。その他、パートナースタッフ以外にも教育省、病院からサポートを受けている。

② DDSP スタッフの給与：NPO から支払われている、政府からの給与は得ていない。

③ 日本からの支援：公益信託アジア・コミュニティ・トラストから2年間の新たな支援を受けられるようになった。(2013年11月追加調査で判明)

④ その他：日本からのさらに多くの支援を求めている。特に、遠隔地の肢体不自由の子どもたちが特別学級などに通学できるように、リフト付きバスを希望している。

⑤ 現在の DDSP のドナーは、以下の通りである。
Australian Aid, Australian Red Cross, Goutte d'eau Foundation, A Child Support Network, Global Interaction, Kinderpustzegels, Medical Scientific Aids for Vietnam, Lao and Cambodia(MSA VLC), Heifer International Cambodia, Aide et Action。

3 結果2（教育面での DDSP の活動）

1. 対象の学校：

指導しているインクルーシブ教育の学校は全てプルサット県にあり、その数は40校である。プルサット市や近郊の学校もあるが、県内の遠い学校へも支援している。支援はほぼ毎週、月曜日から土曜日まで一週間を通して教材提供などの定期的な支援をおこなっている。

2. 対象児：

支援している対象児童の障害種は肢体不自由と知的障害であり、ほぼ、500名の子どもたちを対象としている。その中で、インクルーシブ教育対象の子どもたちは388名である。そのほか、聴覚障害児が24名、後述する小学校に併設されている知的障害児のための特別学級に16名、治療センターには73名在籍している。治療センターにいるほとんどの子どもが脳性マヒである。そのほか、直接支援できないような遠隔地に障害のある子どもたちが多数いることを把握しているが、DDSPとして支援できないでいる。

3. 視覚障害児：

Children with disabilities projectには38名の視覚障害児が在籍し、支援対象児は弱視児と、片眼児である。全盲生への点字指導等の支援はおこなっていない。DDSPには、視覚に障害のある子どもたちへのプログラムがないため、彼らへはプルサット市から3時間ほど離れたBattambang市にある、Krousar Thmey Battambang校

と連携して、支援している。

4. 指導の実際

① 公立小学校ではインクルーシブ教育がおこなわれているため、DDSPは直接、障害児へ指導することはせず、子どもたちを指導する小学校教師へ対して指導をおこなっている。

② 障害児の状況を直接・間接に把握しながら、教育省と連携して、障害のタイプに応じた適切な教育方法を公立小学校教員へ指導している。

③ DDSPでは直接、子どもたちがセンターに来ることはないが、次のような3つの方針で関わっている。

a. 私たちは、子どもたちとともに活動する。

b. 私たちは、学校(教師)と連携する。支援する子どもがどのような障害であるかについて、十分に教師と協議する。

c. 私たちは、地域社会と連携する。障害のある子どもたちと直接に関係し、支援する。

5. 教員研修等

1. 研修：教師数が40名以上の学校へは、障害のある子どもたちへの指導について自前で研修することが可能であると判断し、DDSPとしての研修をおこなっていない。教師数が40名未満の学校の教員へは研修をおこなっている。

2. 理学療法：プルサット市の病院内に理学療法センターを有し、そこでDDSPのスタッフが子どもたちへ治療に関わり、指導をおこなっている。

6. 各種の検査

① 視聴覚検査：視聴覚検査は日本と同様に医療の領域であるので、プルサット市の医師が検査をおこなっている。日本国内の学校で実施されているような簡易な検査もおこなわない。

② 知能(発達)検査：カンボジア国では、知能(発達)検査は医療の領域であるので、医師以外のDDSPのスタッフは知能(発達)検査を直接実施しない。DDSPの活動の中で知能(発達)検査を実施する場合は、医師の指導の下にDDSPのスタッフが検査をおこなっている。

7. 肢体不自由者への対応(車いすの提供):

プルサット市でも海外の車いすや修理用の部品は購入することができるため、DDSP が対象児者へ提供している。修理などの部品の購入が市内で困難な場合には、Battambang 市の病院やプノンペンの Khlang 病院から調達している。

4 結果3 (特別学級)

DDSP のディレクターによれば、カンボジア国の公立小学校に併設された特別学級はプルサット市にあるこの Prey Nhy 小学校の一学級だけである。DDSP はこの学級に対して創設時より継続的に支援している。教育省から DDSP の紹介を受けたときには、主として知的障害児対象のこうした学級についての紹介はなかった。また、JICA の教育担当者からも、DDSP は既知ではあるが、この特別学級の存在は把握していないとの回答があった(JICA:2013年9月面談)。

1. 所在地 プルサット県プルサット市 Prey Nhy 小学校に併設の特別学級である。DDSP からはタクシー、バイク、トゥクトゥク等の交通機関を利用して10分あまりの距離にある。

2. 在籍数 1年生から6年生までの計16名。

3. 対象児 在籍は16名であるが、当日は12名であった。授業参観をとおして観察したところ、程度の差はあるものの、全員が知的障害を有していると思われた。DDSPによる通学していた対象児の12名の内訳は次の通りである。

ダウン症:3名、知的障害(水頭症):2名、知的障害:2名、視覚障害(弱視):2名、「自閉症」(おそらくは、弱視と知的障害):1名、肢体不自由:2名。教師とのやりとりを見る中では、視覚障害児はほぼ普通学級で学べる程度の知的障害と思われた。なお、ここでの「自閉症」は医師の診断に基づく DDSP のディレクターの説明によるものであり、WISC 等の検査結果によるものではない。なお、ディレクターからは自閉症児を2名との回答であったが、1名については明らかにダウン症児であったため、この内訳とした。また、弱視児に関しても、強度近視の可能性がある。聴覚障害児は在籍していない。



Fig.3 授業風景

4. 教室について 教室の前2/3は黒板に向かって机が「コ」の字型に配列されていた(fig.3)。机の後ろ、1/3は、ブロック遊具などがおいてあるプレイ・スペースである。

車椅子使用児がいるために、外から教室へのアプローチを含めて、黒板前の段差などにも傾斜板が設けられていた。

5. 指導方法 2名の教諭による複式学級である。一斉授業ではあるが、多くの子どもたちは学習内容(当日は算数)の理解まで至っていないと感じられる。指導時に算数の教科書を開いていたのは3名、同時刻に後ろのプレイ・スペースで活動する児童もいたが、授業中、教師からその児童へは特別の指導はなかった。プレイ・スペースでの活動している児童の他は、隣の児童へ話しかけることはあったものの、歩き回ることもなく着席していた。なお、当日は教師1名による指導であり、2名体制の学級運営を見学することが出来なかったのは残念である。

指導後、プレイ・スペースで活動している知的障害児、肢体不自由児、視覚障害児以外は全員が黒板の前に立ち、歌い踊り、授業の終わりとしていた。

6. 教材教具 教材教具には日本と共通するものも見受けられた。タ・クマウ市の自閉症施設やプノンペン特別市の知的障害の「学校」・施設と比較すると、「遊具」的なものが多かった。



Fig.4 授業後の踊り

7. 教員への指導 DDSP が継続的に巡回指導しており、必要な教材の提供も随時おこなっている。

本稿は、結果 1, 2, に示す質問項目の設定、全体の

執筆調整を間々田が担当し、VAN が当日までの連絡調整、当日の通訳、追加調査を担当した。

引用・参考文献

- ・間々田和彦 (2012) カンボジア国の特別支援教育報告①－視覚障害を中心に－, 筑波大学特別支援教育研究 No.6,p.37
- ・間々田和彦 (2013A) カンボジア国の特別支援教育報告②－統合教育パイロット校, 地方の盲啞学校, 知的障害施設肢体不自由施設等－, 筑波大学特別支援教育研究 No.7,p.70
- ・間々田和彦 (2013B) カンボジア国の障害児への教育支援①－視覚障害, 肢体不自由－ SNE 学会第 19 回大会論文集
- ・間々田和彦, VAN Vy(2013) カンボジア国のインテグレーションの現状と課題 - カンボジア国の特別支援教育支援に関する研究② -, 日本特殊教育学会第 51 回大会論文集 ,P2-J-3.

Report of special needs education in cambodia No.3

Community support of children with disabilities, and
Special class that is attached to a public primary school

Kazuhiko MAMADA * VAN Vy **

* Special Needs Education of the Visually Impaired, University of Tsukuba

** Linguistic Department of Royal University of Phnom Penh